



スタンダール ★★

赤 と 黒
恋 愛 論

桑原武夫・生島遼一・鈴木昭一郎 訳

世界文學大系

世界文学大系 22

スタンダード ★★



昭和 35 年 5 月 10 日発行

定価 600 円

訳者	桑生 鈴木	原島 昭	武遼 一	夫一郎
発行者	古	田		晁
印刷者	多	田		基

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291) 局7651

目次

赤と黒

恋愛論

スタンダール

解説

桑原武夫訳
5

生島遼一郎訳
309

アブラモヴィッチ
493

桑原武夫訳
513

裝
幀
庫
田
發

スタン
ダール



赤と黒

— 一八三〇年代記¹⁾ —

第一部

真実、おそるべき真実。

ダントン

出版者より

この作品がまさに発表されようとしたとき、あの七月の大事件²⁾が勃発して、すべての人々の頭を空想的な³⁾のしみにほとんどふさわしからぬ方向にむけてしまった。われわれはこの原稿が一八二七年に書かれたものであると信ずる理由がある。

第一章 小都会

いまのよりましな連中を
数千一緒に入れてみたところで、
籠は陰気になるばかりだ。

ホップス

ヴェリエールの小さな町はフランシユ・コンテ⁴⁾のもっとも美しい町の一つにかぞえることができる。赤瓦の、とがった屋根の白い家々が丘の斜面にひろがっていて、そこへ勢いよく成長した栗の木の茂みが、丘のごくわずかな起伏までもくつきり描き出している。ドゥー川が、昔スペイン人に築かれ今はもう廃墟になった、町の城壁の下数百尺ばかりのところを流れている。ヴェリエールは、北方を高い山でかこまれているが、それはジュラ山脈の一支脈である。このぎざりの歯のようなヴェラ山の頂は十月初めて寒さの来るところから雪におおわれる。山からはとばしる急流は、ドゥー川へ落ちるまでにヴェ

リエールの町をつらぬいて、多くの製板小屋に動力をあたえる。きわめて簡単な工業だが、これが市民などというよりも、むしろ百姓に近いこの住民の大多数の生活を、幾分らくにしているのだ。しかし、この町をゆたかにしたのは製板小屋ではない。ナポレオン没落後、ヴェリエールのほとんどすべての家の表構えが改築されたといわれるくらい、一般に暮しがらくになったのは、ミユルーズ出来と称するまがいの更紗製造のおかげである。

この町へ一步ふみこむと人々は、恐ろしいかつこうをした騒々しい機械のひびきに、どきもをぬかれるだろう。急流の水が動かす車輪の力によつて持ち上げられた数十の重い鉄錠が、道の敷石を踊らせるほどの地ひびきを立てて落下する。この鉄錠の一つ一つが、毎日何千と数えきれぬくらい⁵⁾の釘を造り出すのだ。生きいきしたかわいい娘たちが、この巨大な鉄錠の打つ下へ鉄片をさし出すと、それがたちまち釘に変わ

(1) 初版には「十九世紀年代記」とある。

(2) 一八三〇年、いわゆる七月革命をいう。

(3) フランスの古い州の一つで、ほぼいまのオートソーヌ、ジュラ、ドゥーの三県の地域を占めている。西はジュラ山脈を越えてスイスに接し、東はブルゴーニュ、北はロレーヌにつらなる。ドゥー川が中部を貫流しており、プザンソンはその首都である。ヴェリエールは、最後に著者自らいつているように、空想の町である。もともとながくスペイン領であったのを、一六七八年ルイ十四世がフランス領とした。

(4) フランスで最初に更紗の製造をはじめた、その名産地。

る。一見いかにも荒っぽいこの仕事は、マルヴェンツフランスを分つこの山間へ、初めて足をふみ入れた旅客をもっとも驚かすものの一つである。大通りを上ってゆく人々の耳をつんぼにするこのりっぱな製釘工場は誰のものかと、ヴェリエールへやってきた旅客がきくと、土地の人はまだるっこい調子で答える——「ありや町長さんのもんでさあ」

ドゥー川の岸から丘の頂まで上るこのヴェリエールの大通りで、旅客がほんのしばらくでも足を休めていると、きつと一人のいそがしげな、尊大なふうをした大男が現われるのを見かけるにちがいない。

その男の姿を見ると、皆がすばやく帽子をぬぐ。こま塩頭で、ねずみの服をきている。彼は数個の勲章の佩用者なのだ。額がひろく、わし鼻だが、全体として一種ととのった容貌をしている。だから一見したところ、町長らしい貫禄とともに、五十近くの人にも見かける、あの一種の愛敬をさえたたえていると思うかもしれない。だがバリの旅客はすぐに、何となくあさはかな機転のきかぬ一種の自己満足と、うぬぼれの態度が不愉快になってくるだろう。結局、この男の才能は貸した金はじつにがっちり支払わせるが、借りた金はできるだけおそく支払うということだけだということがわかる。

ヴェリエール町長レナール氏とは、こういう人物だ。彼は重々しい足どりで道を横切つて町役場にはいり、旅客の眼から消えてしまう。が、

旅客がさらに散歩をつづけて、道を百歩ばかり上ってゆくと、外観のかなりきれいな邸宅と、家にそうた鉄柵ごしにりっぱな庭園が眼につくにちがいない。その向うには、ブルゴーニュをかこむ丘陵にかぎられた地平線が眺められるが、それは眼の保養にあつた地向きにできたようだ。この眺望は旅客に、つまらぬ金銭問題の愚臭が芽たるあたりのふんいきをしぼし忘れさせてくれる。彼はもうそろそろこの不愉快なふんいきのために息苦しくなりかけているころなのだ。

旅客はこの家がレナール氏のものだと教えられる。ヴェリエール町長が、こんなりっぱな切石造りのすまいを近ごろ新築したのも、彼があるの大製釘工場から得たもうけのおかげだ。ひとのいうところによると、彼の家はスペイン系の旧家で、ルイ十四世の征服よりずっと昔からこの地方に定住していたらしい。

一八一五年以来、彼は工業家たることを恥とされている。一八一五年にヴェリエールの町長になったからだ。幾段ものテラスになってドゥー川の岸まで下っている、この宏大な庭園のあちこちを支える石垣も、鉄の取引きのほうでレナール氏がうまくやったおかげでできたものなのだ。

ライブチツヒ、フランクフルト、ニュールンベルクなど、ドイツの工業都市をめぐるあの絵のように美しい庭園を、フランスに求めているけない。フランシユ・コンテでは、石垣をたくさんつくればつくるだけ、また積み重ねた石で

自分の地所をふさげばふさぐだけ、それだけ多くの尊敬を隣人に要求してもよい、ということになっている。石垣だらけのレナール氏の庭園も、彼がいくつかの小さな地所を金にあかして買占め、その上に造ったものだといふので、いっそう評判が高いのだ。たとえばヴェリエールの町へはいってきたとき、ドゥー川の岸近く奇妙な場所にあるので、きつと諸君の眼をひいた製板小屋——『ソレル』という名が、屋根の上ののっかった看板に、でかい字で書かれているのに諸君は気がつかれただろう——あの製板小屋にしても、六年前までは、今レナール氏の庭の四番目のテラスの石垣が築かれている場所を占めていたのである。

いつもの傲慢さにもにず、町長さんはいじわるで頑固な田舎者の老ソレルを向うにまわすと、いろいろとかけひきをしなければならなかった。その小屋をよそへ移すことを承知させるためには、ルイ金貨をどつさりやらねばならなかった。製板小屋の動力のもとになる公用河川のほうは、バリの自分の勢力を利用して、それを迂回させる許可をやつと得た。この恩典は一八二〇年の総選挙後、彼にあたえられたのだ。

彼はソレルに、五百歩ばかり下流のドゥー川の岸に、一アルパンに対して四アルパンの割で土地をやった。そしてこの位置はモミ板の取引きには、ずつと有利だったのに、ソレル老——彼が金をこしらえてから皆がそう呼ぶようになったのだが——は、隣人が焦躁と土地所有欲に

かられているところへうまくつけこんで、六千フランの金をうまうまとききあげた。

この協定が土地の利口な人々の非難的となつたのはほんとうだ。かつて、それは今から四年前のある日曜のことである、町長の制服を着用して御堂から帰るときにレナール氏は、三人の息子にとりまかれた老ソレルが自分を見てにやにや笑っているのを遠くから見かけた。このにやにや笑いが町長さんにはつきり不覚をさくらせたが、もうおそい。もつと有利に交換できたものをと、この時以来レナール氏はそのことばかり考えている。

ヴェリエールでみんなから尊敬されようと思つたら、石垣をたくさんつくることも必要だが、それと同時にパリへ出かけるために春のころジュラの山路を越えてくる石工が、イタリアからもってくる設計をけつして採用しないことである。万が一そんな新しがりやをしようものなら、その向う見ずの普請気ちがいはい生おつちよ、ちよいの折紙をつけられて、フランシエコンテの世評を左右するあの賢明着実な連中から永久に見放されてしまう。

事実、この賢明な連中がこの土地でじつに不愉快な専制政治をしている。パリとよばれるあの大共和国で生活したものが小都会の暮しがいやりきれないのは、この不愉快な言葉のためである。世論の専横は、(しかも何という世論か!)フランスの小都会においても、アメリカ合衆国においても、同様に愚劣なことだ。

第二章 町長

権力! そんなものはつまらぬものじゃありませんか。愚者の尊敬、小児の感嘆、富者の羨望、賢者の侮蔑。

バルナウ

レナール氏が運よく、行政官としての名声をあげたのは、ドゥーの流れから百尺ばかりの高さで、例の丘のすそをからむ散歩道に巨きな石垣が必要になったためである。ここは絶好の位置を占めていて、眺めはフランスでもつとも美しいものの一つだが、惜しいことに毎年春になると雨が道の上に溢れて、雨溝がはれ、歩けなくなってしまう。この不便を皆が痛感するようになった結果、レナール氏がぜひとも、高さ二十尺、長さ三、四十間の石垣をつくらねばならぬことになって、それが彼の治政を不朽にしたというわけだ。

この石垣の胸壁——前々内務大臣がヴェリエールの散歩道の計画に絶対反対を表明したので、レナール氏はこの問題のためにパリへ三回も出むかねばならなかったが、その石垣の胸壁も今ではちゃんと地上四尺の高さにできあがっている。おまけにこの頃は、現任前任すべての大臣連をばかにするように、切石をはって裝飾までしているのだ。

前の夜あそんできたパリの舞踏会のことを思

いかべつ、青味がかった美しい灰色の大石材によりかかつて、私は幾度ドゥーの谷に目をそそいだことだろう! かなた、左岸には五つ六つの折れ曲つた枝谷があり、その底にはささやかな水流がごくはつきりと見わけられる。それが滝また滝と奔流して、ドゥー川に落ちてゆく。この山間では陽は焼けつくようだ。陽が頭上から照りつけるとき、このテラスで旅人の夢想をまもるものは、みごとに成長したプラタナスの樹ばかりである。この樹の速かな成長と、青味がかったその美しい緑は、町長さんが市会の反対を押しきって、散歩道の幅を六尺以上も拡張した結果、あの巨きな石垣のむこうに作らせた埋立地のおかげなのだ。(彼は極右党で、私は自由主義者だが、このことに関しては私は彼に讃辞を呈するものだ)そしてこのために彼やヴェリエール貧民收容所の良所長ヴァルノ氏は、このテラスがサン・ジェルマン・アン・レのそれに匹敵するという意見をいだいているのである。

(1) 王政復古期には鉄は重要な産業とみなされた。スタンダールは一八五五年に『工業家に対する新しき陰謀』といふパンフレット中でそのことを痛論している。また後に『漫遊客の手記』では自ら鉄取引業者になって旅行している。

(2) ドファイネの三部会によりフランス大革命の烽火をあげたダルノーブル出身の政治家(一七六一—一九二二)。スタンダールの尊敬していた人物。

(3) ヴェルサイユから十四キロにある宮殿。大造園家ル・ノートル設計の有名なテラスがある。

私の考えでは、この Cours de la fidéité (忠誠散步道)——この公式名称を大理石板にはりつけたところが、二十カ所たらずある。そしてそのおかげでレナール氏は、勲章をまたも一つもうけたのだ——について非難すべき点は、たった一つしかない。私が非難したいのは、あの勢いのいいプラタナスをぎりぎりいっぱい刈りこませる当局の野蛮なやり口だ。樹の頭を低く、まるく平らに刈りこんで、ごくありふれた野菜か何かのようなかつこうにしてしまわないで、イギリスで見かけるようなりっぱな姿に成長させてやるのが一番いいのだが。しかし町長さんの意志は圧制的だ。町有のあらゆる樹木は年に二回、情けようしやもなく枝をはらわれる。土地の自由党の連中は、助任司祭マスロン師が刈りこんだ枝葉を自分のものにする習慣になって以来、お上の植木屋の鉄の入れかたがいっそうひどくなったというが、それは邪推というものであらう。

このマスロンという若い僧侶は、シェラン師および付近の数人の司祭連の目付役として、数年前プザンソンから派遣されたのだ。ヴェリエールに隠退していた、イタリヤ侵入軍の一老軍医正——町長の説によると、彼は生前急進派で同時にナポレオン党だった——が、かつてこの美しい樹木の定期的な乱暴な刈りこみについて、町長に苦情をいっただけである。

「わたしは影をたいせつにしたい」とレナール氏はレジョン・ドヌール佩用者に向って語るの

にふさわしい威厳をもった口調で答えた。「わたしは影をたいせつにしたい。美しい影をつくるために、わたしの樹を刈りこませるのです。それに、樹木というものには、そのほかに用途があろうとは思われません。あの有利なクルミの樹のように、いい収入にならない限りは」「収入になる」——これこそヴェリエールにおいて万事を決定する重大な言葉である。そしてまたこれだけの言葉によって、いつも大多數の住民の脳裡にあることが言いつくされているのだ。

「収入になる」——この言葉が、諸君の眼にはあんなに美しく映じたこの小都会において、万事を決定する規準となるのだ。町をめぐるさわやかな深い谷々の美に心をひかれてくる他国のひととは、最初この町の住民は「美」に対する感受性に富んでいると思う。事実彼らは自分たちの国の美しさをしょっちゅう口にしてしているのだし、彼らがその美しさを大いに尊重していることは否定できない。だが、それはこの風景が、他国の人々を引きつけて、その落す金で宿屋がもうけ、またそれが入市税というからくりで町に収益をもたらしからにはかならない。

朗らかな秋の日、レナール氏は妻に腕をかし「忠誠散歩道」を散歩していた。重々しい夫の言葉に耳をかしながら、レナール夫人の眼は、たえず気づかわしげに三人の男の子の挙動にそそがれていた。十一ぐらに見えるいちばん上の子はともすると胸壁に近づいて、登りたそう

な顔をする。するとアドルフという名がやさしい声で呼ばれるので、子供はその野心的な企てを断念するのだ。レナール夫人は三十ぐらに見えるが、まだなかなか美しい。

「きつと後悔することだろう。あのバリっ子の先生は」とレナール氏は、ふだんよりずっと青い顔をして腹立たしげにいった。「おれには王さまの側近に知合いがないわけじゃなし……」しかし、これから二百ページにわたって田舎の話をしように思っている私ではあるが、冗漫な田舎の対話と、そのいわゆる巧みなやりとりを書きつらねて、諸君を悩ますような野暮なまねはよしたいと思う。

ヴェリエール町長にそんなに嫌われたバリの紳士というのは、アペール氏にはかならない。二日前にこの男は牢獄やヴェリエール貧民收容所ばかりか、町長そのほか土地の主だった地主たちによって無報酬で経営されている慈善病院の内部にまで、うまうまとはいりこんだのである。

「だって」とレナール夫人はおずおずいった。「そのバリの方が、いったいどんなあなたの迷惑になることをしたりできますの？　だって、あなたは誠心誠意、貧しい人々のためを計っていらっしやるんですもの」

「あいつはただ悪口を言い、ふらしにやって来んだ。いずれ自由主義の新聞にいろんな記事のせるんだらう」

「そんな新聞、あなたは一度もお読みにならな

いじゃないの」

「だがひとの口からそういう急進派の記事の噂がわれわれの耳にはいつてくる。すると、そういうことが、こちらの心を乱して、われわれがよいことをするさまたげになるんだ。このわしは司祭のやったことをけつして許さないぞ」

第三章 貧しいものの幸福

徳高く策を弄することなき司祭は、村にとつて神というべきである。

フリニール

このヴェリニールの司祭は、八十歳の老人だが清浄な山の空気のおかげで、鉄のような健康と性格をもっていた。この人には牢獄、慈善病院、また貧民収容所でさえ、好きな時にいつでも視察できる特権があつた、ということをもまず知っておかねばならない。パリから司祭に紹介されてきたアペール氏は、手ぎわよく朝の正六時というのにこの不思議な町にやつてきて、早速その足で司祭の宅を訪ねたのだった。

貴族院議員で、この地方一番の大地主のラ・モール侯爵の紹介状に眼を通しながら、シェラン師は考えこんでいた。

「わしは年もつっているし、土地の人にも好かれてゐる」とやがて彼はつぶやいた。「あの連中もめつたなまねはしないだらう！」すぐにパリの紳士のほうへ向きなおつて、この年にもに

ず、多少の危険をおかしてりつぱな行為をやろうとする喜びに、眼をはげしくかがやかしながら、

「さあ、わしといつしよに來なさるがよい。しかし、典獄やことに貧民収容所の監視人のまえでは、あたりのものについて、いさひ批評がましいことをいわぬようにしていただきたい」アペール氏は相手がりつぱな人物であることを知つた。この尊敬すべき司祭の後について、彼は牢獄、慈善病院、収容所を訪れ、いろいろ質問を試みたが、あやしげな答弁に接しても、少しも非難がましい言葉をほこうとはしなかつた。

この視察は数時間かかった。司祭は彼を昼食に招いたが、アペール氏は手紙を書かなければならぬからといつてこつた。彼はこの親切な人に、これ以上めいわくをかけたくなかつたのだ。三時ごろ二人は貧民収容所の視察をおわつて牢獄へもどつて來た。そこには背丈が六尺もあるがにまたの巨人のような典獄が、門の前に立ちほだかつていた。卑しい顔つきが恐怖のためにとても醜かつた。

「ああ、もし！」と彼は司祭の顔を見るとすぐいった。「そこにあなたといつしよの方はアペールさんじゃございませんか」

「それで？」

「じつは昨日から厳命されておりますので。知事さんのお使いの憲兵が夜中馬を飛ばせてやつてきて、アペール氏を牢獄の中へ入れてはなら

ぬという命令がございまして」

「いかにも、ノワルーさん、わしといつしよの旅のお方はアペールさんにちがいない。だが、あなたはわしが夜でも昼でも好きな時に好きな人をつれて、牢獄へはいることができる特権をもっていることはご承知だらうな」

「承知しております、司祭さま」と典獄は、棒で叩かれるのがこわさいうことをきくブルドッグのように、頭をたれて低い声でいった。「ただ、司祭さま、わたしには妻子があるのでございます。万一このことが上申されたら首にされてしまいます。この職のほかには生活の道がありません」

「職を失つてこまるのは、わしとても同じことです」と次第に激しい口調で、良司祭が答えた。「たいへんなちがいがいい！」と典獄は激しく答えた。「あなたは、司祭さま、誰でも知っております。八百フランの年収があり、りつぱな不動産があります……」

こういう事実が、じつにさまざまに曲解され、誇張されて、二日前から小都市ヴェリニールにあらゆる悪感情の渦を巻かせていた。それはげんに今も、レナール氏とその妻のあいだに起つた小競り合いの種になつていたのだ。その日の朝、彼は、貧民収容所長ヴァルノ氏を伴つて、司祭の宅へ行つて、もっとも激しい不満の意を表明してきたのだった。だれ一人として後立てをもたぬシェラン師には、彼らの言葉のもつ効

果がはつきりと感ぜられた。

「よろしい！ それじゃわしは、八十の年にもなつて、このあたりでやめられる三人目の司祭になるというわけですな。この土地へきてから五十六年、町のひとはみんなわしが洗礼してあげた——この町もわしのきたころは、ただ大きい村というのに過ぎなかったが。毎日わしは若い人たちの結婚式をやっているが、その人たちのお祖父さんも昔わしが結婚させたのだ。ヴェリエールはわしには、家族のように思えるが、それと別れるのがこわさに、良心をまげたり、良心に背くような振舞いはしたくない。あの客人に会ったときも、わしはこう思った——このパリからきた人は、ほんとに自由主義者かもしれない。自由主義者というのがそもそも多すぎる。しかしそれにしろ、このひとが町の貧民や囚人に、いったいどうして不利益なことをしたりすることができよう、とね」

レナール氏の、ことに貧民收容所長ヴァルノ氏の、非難がますます激しくなってきたので、「よろしい！ 免職にしていたらこう」と声をふるわして老司祭は叫んだ。「だがやめさせられても、わしはやはりこの町で暮らしますぞ。ごぞんじのとおり、四十八年前にわしは、年収八百フランの畑地を相続しておる、その収入で暮らしてゆく。わしは、みなさん！ 自分の地位を利用して不正な金をためたりはしませんぞ。職を奪うというような話を聞かされても、わしがそんなにびくつかぬのは、おそらくそのため

だろうが」

レナール氏は夫婦仲むつまじく暮らしていた。しかし妻が「そのパリの人が、いったいどうして囚人に不利益なことをしたりすることができましよう」とおずおずくり返していったとき、彼は何と答えていいかわからず、すっかり腹を立てようとした刹那、妻が大きな声で叫んだ。二番目の子供が、テラスの石垣の胸壁の上へ登ったところだった。そしてこの壁は、向う側のブドウ畑から二十尺以上の高さがあるのかわず、その上を走っているのだ。子供を驚かして、かえって落すようなことはあるまいか、彼女はそれがこわさに声をかけることすらできなかった。しかし子供も自分の勇敢な行為に得意になつていったものの、ふと母の顔を見るとまっ青なので、散歩道へ飛びおりて母のほうへ駆けて来た。子供はひどくしかりつけられた。

この小さな出来事が会話の向きを変えた。

「わしはどうあつても、製板所のせがれのソレルをうちへつれてきたんだ」とレナール氏はいった。「子供たちもそろそろわしらの手に負えなくなつてきたから、あれに監督させよう。一人前の若い僧侶、とまあいい男で、ラテン語もよくできるから、子供に力をつけてくれるに違いない。しっかりとした人物だと、司祭もいっていた。三百フランやって、食費はこつちで持つてやろう。ただ思想方面は、わしも少々疑いをもつていた。というのは、あれは、従兄弟だとかいって、ソレルの家へ居候に来て

いた、例のレジョン・ドヌールの老軍医正の秘蔵つ子だったんだからな。あいつは実際、自由派の廻し者だったにちがいない。山の空気が喘息によくきくから、などといったが、そんなことはべつに証拠があるわけではなし。イタリア戦争のときはブオナバルテの部下で、どこの戦にも出たのだが、そのくせ、帝政問題が起ると、『反対』の署名をしたというわさだ。この自由主義者がソレルにラテン語を教えてやり、また自分が持つて来たあのたくさんの本をくれてやつたんだ。だからわしはあの製板所のせがれをうちの子供につけようなどとは、まったく考えもしなかった。だが司祭は——この人と一生の仲たがいをしてしまつたあの騒動のちょうど前日のことだよ——、このソレルは、神学校へはいるために三年前から神学を勉強している、とわしにいった。してみると、あれは自由派じゃない、ラテン語学者なんだ」

「この話には、も一つ都合のいいことがあるんだ」とレナール氏は、ずるそうな様子で、妻のほうをうかがいながら言葉をつづけた。「ヴァルノの奴、このあいだ四輪馬車用に、ノルマンディー種のいい馬を二頭買ったばかりで、すっかり鼻を高くしているが、先生まだ子供に家庭教師は雇っていないからね」

「あの方、ほんとにあたしたちの人を横取りするかもしれないわ」

「じゃ、お前はわしの考えに賛成してくれるんだね」とレナール氏は、ふといま妻がいいこと

をいったのに、感謝の微笑をおくりながら、いった。「さあ、これで話はきまつた」

「まあ！ あなたって！ ずいぶんてつとり早くお決めること！」

「わたしには決断力がある、このわたしには。司祭にもそこは十分わからせてやったが。隠してみても始まらない、この町でわれわれの周りにいるのは自由派ばかりだ。そういう更紗商人たちがみんなわしをねたんだ。それは確かだ。中には成金になった奴も二、三ある。そうだ、そういう連中に、レナールさまのご子息が専任家庭教師につれてられて、散歩にゆくところを見せてやらなくちゃ。威厳を示してやるんだ。わしの祖父さんも、小さいときは家庭教師があつたと、よく話しておられた。百エキュ(一エキュは三フラン)かかることはかかるが、それくらいのこととは、われわれの身分を保つためには、必要な出費と思わなくちゃならん」

この突然な決心を聞かされて、レナール夫人はすっかり考えこんでしまった。彼女は背丈が高く姿がよくて、この山間の人がいうとおり、土地の美人だった。身のこなしには、どこかうぶな若々しいところがあつた。パリの人の眼からみると、無邪気でびちびちしたこの素直な美しさには、いささか肉感的なものを思わずほどの力があつたのかもしれない。だが夫人は、もし自分がそんな方面で成功したことを知ったら、さぞ恥かしがつたことだろう。おしやれしうとか、気取ろうとか、そんな気はてんでなかつた。

た。金持の収容所長ヴァルノ氏が彼女に言いつたが、ものにならないかつたといううわさもある。これが彼女の貞操にすばらしい光輝をそえることになった。というのは、このヴァルノ氏というのが太い黒い頬髯を蓄えて、色艶のいい顔をした、頑丈な体格のりっぱな若者で、地方では美男子と呼ばれる、粗野で、あつかましくて、騒々しい連中の一人だったからだ。

しんから内気で、はた目にはたいへんむら気な性格をもつたレナール夫人は、ことにヴァルノ氏のいつもせかせかした態度とばか声がきらいだった。ヴェリエールの町の人々が楽しみにしていることに、まるで近寄ろうとしないものだから、あの女は家柄を鼻にかけているんだという評判をたてられた。彼女はそんなつもりではなかつたが、町の人々がだんだん自分の家へ近寄らなくなるのは、たいへん嬉しかった。つまずについてしまえば、夫に対して少しも策略がなく、パリやブザンソン出来のきれいな帽子を買ってもらえる絶好の機会を、いつもむざむざと取り逃がすので、彼女は町の夫人連からは愚かな女だと思われていたのである。ただ一人で勝手にわが家の美しい庭をさまよつてさえおれば、彼女にけつして不満はなかつたのだ。世慣れない彼女は、夫を批評したり、夫をいやだと考えたりするほど思ひ上つた気持には、かつて一度だつてなつたことはなかつた。はつきり自分の胸に問うてみたわけではないが、夫婦のあいだにこれ以上やさしいまじわりはない

ものと思つていた。彼女は子供たちの将来のことを話すときの夫がいちばん好きだった。レナール氏は長男を軍人に、次男を裁判官に、三男を僧侶にするつもりだった。要するに、彼女は自分の夫が、自分の知っているどの男よりも、ずっとまじだと思つていた。

この妻の判断はまちがつていない。ヴェリエール町長は、伯父ゆずりの半ダースばかりのしやれのおかげで、才知があり、ことに上品だという評判を得ていたのだ。伯父のレナール老大尉というのは、大革命前にオルレアン公の歩兵連隊に勤務して、パリへ出ると、公けのサロンへ出入することを許されていた。彼はそこで、モンテツソン夫人、有名なジャンリス夫人、ならびにパレローワイヤールの改築者デュクレ氏に出会つたものである。こういう人物が、レナール氏の話す逸話には、ふたこと目に出てくる。しかしこんなに話すに骨の折れる思い出話、だんだん彼にはめんどろになつてきた。そして少し以前から、彼はオルレアン家に関する逸話は、よほどの場合のほかは話さなくなつた。

(1) ナポレオン・ボナパルトをイタリヤ人風に発音した蔑称。

(2) オルレアン公のおもひもの(一七三七—一八〇六)。

一七三三年に秘密結婚をした。

(3) 前記オルレアン公の王子の傳育官(一七四六—一八三〇)。女流小説家で教育に関する著作もある。

(4) 一六二九年リシュリュエのために建てられた宮殿。のち王室のものとなり、代々オルレアン公のすまいとなつた。

デュクレは時のオルレアン公に進言して、この宮殿を増築したのである。

その上、彼は金銭に関する話のときは別として、たいへんいんぎんだつたから、ヴェリエールでいちばん貴族的な人物だと見なされていたのもっとものである。

第四章 父と子

そして、そんなふうだとしても、

それが私の罪だろうか？

マキアヴェルリ

(うちの家内はなかなか頭がいい！) ヴェリエール町長は、その翌朝六時、ソレル爺さんの製板小屋のほうへ下ってゆくときにそう思った。

(夫の威厳を保つために、ああはいつておいたものの、天使のようにラテン語をよく知っていると、あのソレルの小坊主を、もしもこつちのものにしておかなかつたら、あの収容所長の奴め、ちつとの間もじつとしていない男だから、ほんとにわしと同じ考えを起こして、横取りしかねない、そこまではこのわしも考えていなかったんだ。そんなことにでもなつたら、あいつさぞかしうぬぼれた口調で子供の家庭教師のことをしゃべくるこつたろう！……だが、この家庭教師もいったんわしのところへきたら、僧衣をつけるようになるだろうか)

レナル氏は、この疑問に夢中になっていたとき、ふと、六尺近くもある一人の田舎者が、あけがた近くからたいそう精を出して、ドゥー

の流れに沿うて曳き船道の上に置いた材木の寸法を取っているらしいのを、遠くから見かけた。男は町長さんが近づいてくるのを見て、あまりうれしそうなふうをしなかった。それは、材木が通り道をふさいでいるし、またそこに置くことは規則違反だつたからである。

ソレル爺さんは——その百姓というのが彼だつたのだ——せがれのジュリアンに関するレナル氏の奇妙な申し出にたいへん驚いたが、またそれ以上に喜びもした。にもかかわらず彼は、例の悲しげに不満そうな、また無関心の様子で、町長の言葉を聞いていた。こうした態度によつて、この山間の住民は、彼らの奸策を巧みにおおいかくすべしを心得ているのだ。スペイン統治時代に奴隷だつた彼らには、いまだにエジプトの農奴のような顔つきが残っている。

ソレルの答えは、最初のあいだは、彼がそらんじている尊敬を表わすあらゆる定り文句の長しい暗誦にすぎなかつた。彼の容貌が生れつきもっている偽善の、というよりむしろ横着のような様子をなおいっそうはげしく感じさせる、まずい微笑を浮かべながら、こんな無用の言葉をつくりかえすあいだにも、年老いた百姓の頭は油断なく働いて、いったいどうしてこんなりっぱな人が、あのろくでなしのせがれを自分の家に引き取るなどという気になつたのか、その理由をつかもうとした。彼はせがれのジュリアンが大嫌いだった。しかもそのジュリアンのために、レナル氏は年三百フランという思いも

かけぬ給料を出したうえに、食事ばかりか衣類までそえてやるうというのだ。この衣類についての最後の要求は、ソレル爺さんが巧妙に、とっさにもち出して、これまたレナル氏にうんといわしたのだつた。

この要求に町長は驚いた。(わしの申込みをきいたら、もちろん大喜びに喜ばなきゃならんはずなのに、そうでないところを見ると、ほかからも申し込んだ奴があるに違いない。そしてヴァルノの奴でなけりや、誰がそんな申込みをするものがあるう) レナル氏はソレルをせきたてて、その場で話をきめさせようとしたがだめだった。このずるい老百姓は頭としてそれをこばんだ。せがれにも相談したい、というのだ。地方では金持のおやじが文無しにせがれに、形式以外に相談らしいことをすることがありでもするかのよう。

水車製板小屋は流れに沿うた一つの納屋である。屋根は四本の太い木の柱の上に造られた木組みで支えられている。納屋の中央、八、九尺ばかりの高さのところ、一つの鋸が上下しているのが見え、また一方きわめて簡単な機械装置が材木をこの鋸のほうへ押してゆく。鋸を上させ、また板にする材木を鋸のほうへ徐々に押してゆく、この二重の機械装置を動かすのは、水流によつて回転する一つの車輪である。

工場へ近づくと、ソレル爺さんは例の破れ鐘声でジュリアンを呼んだ。誰も答えるものがない。大きな斧をもった、巨人のような二人の兄

息子が、これから鋸のほうへ運ぶモミの幹を角材にしているのが見えるばかりだ。材木の上に引いた黒い筋どおり一分もはずまいと、一心になって斧を打ち下すたびに、大きな木片が飛び散った。父の声は彼らの耳にはいらなかったのだ。おやじは納屋のほうへ足を向けた。内へはいって、ジュリアンがおるべきはずの鋸のそばをさがしたが、いない。まだそこから五、六尺も上になる、屋根組みの梁のはしら一つに馬乗りになっているジュリアンを見つけた。機械の運転の見張りなどははっておいて、本を読んでいる。これ以上老ソレルを怒らすものはなかった。彼はジュリアンが、兄貴どもとはすつかり違つて、力仕事に適しない弱々しい体つきをしていることは、まあどうにか我慢するとして、この読書癖というやつは辛抱がならなかった。彼自身は字が読めなかったのだ。

ジュリアンを二、三度呼んでみたが、むだだ。鋸の騒音のためというより、若者は本に夢中になつていて、父の恐ろしい声が耳にはいらない。とうとうおやじは年とは思えぬほどの身軽さで、鋸にかかつている材木の上へ飛び乗り、それから屋根を支えている横木の上へよじ登った。恐ろしい一撃が、ジュリアンの手にしていた本を小川の中へはたきとばした。頭の上に同様の烈しい第二撃をうけて彼は平衡を失つた。今にも十三、四尺下に活動している機械の横杆のまっただなかへ転落して、体を圧しつぶされようとした。が、まさに落ちんとした刹那、父

の左手が彼をひつつかんだ。

「何だ、怠けもの！ 鋸の番をする時でも、相変らずろくでもない本が読みたいのか。そんなものは晩に読め。司祭さんのとこへ時間つぶしにゆくときに読むなら、手前の勝手だ」

ジュリアンは、ひどく殴られて気が遠くなり、ずいぶん血も出ていたが、鋸のそばのきめられた持ち場へ近づいた。彼が眼に涙をたたえていたのは、肉体の苦痛のためよりも、愛読書を失つたためであつた。

「おりてこい、こん畜生、話があるんだ」

機械の騒音はまたしてもジュリアンが、この命令を聞きとるのを妨げた。さきにおりていた父は、また機械の上まで登る労力を嫌つて、クルミをたたき落す長い竿をさがしてきて、それでせがれの肩を打った。ジュリアンが下へおりるのも待ちきれないで、ソレル爺さんは荒々しく追いついて、彼を家のほうへ急がせた。(いっただいおれをどうしようというんだ！)と若者は思った。通りすがりに、彼は自分の本が落ちた小川をじっと眺めた。それはあらゆる本のうちで、彼がいちばん心を打ちこんだ『セント・ヘレナ日記』だつた。

彼は頬をあかくして眼を伏せていた。見たところ弱々しい十八、九の小柄の若者で、おし鼻の、ととのつてはいないが美しい顔立だつた。静かなときには、思慮と情熱を示すその黒い大きな眼は、この瞬間、世にも恐ろしい憎悪の色に燃えていた。濃い栗色の頭髮が、ごく低くま

ではえ下つているので、額が狭くて、怒つたときには意地悪そうに見える。数かぎりなく変化のある人間の容貌のうちでも、これ以上目立つた特徴で異彩を放つものは、おそらくまたなからう。そのすんなりと釣合ひのとれた体つきは力よりもむしろ身軽さを物語つていた。ごく幼いころから、その恐ろしく沈んだ様子と、ひどく青白い顔を見て父親は、この子は育つまい、育つたところで一家の厄介ものになるばかりだと思つてた。家で皆からばかにされていた彼は、父と兄とを憎んでいた。日曜に町の広場で、みんなと遊ぶときにも、彼はいつもぶたれてばかりいたのだ。

彼の可愛い顔が、少女仲間の幾人かから優しい言葉をかけられるようになってから、まだ一年とはたつていなくなつた。弱虫というので皆からばかにされていたジュリアンは、かつてブラタヌスの問題で町長に文句をいっただけ、あの老軍医正を心から愛していた。

この軍医はときどきソレル爺さんにせがれの日当を払つてやつて、彼にラテン語と歴史、つまり自分が知つていられるだけの歴史——一七九六年のイタリアにおける戦争の話——を教えてやつたことがあつた。死際に彼はジュリアンに、自分のレジョン・ドヌール勲章と休職年金の未収額および三、四十冊の書物をゆずりあたえた。それらの本のうちでいちばん貴重なものがいま

(1) ナポレオンが流竄地において、ラス・カーズ伯に口授した覚え書。

したが、例の町長の権力によって曲げられた「公用河川」の中へはねとはされたのである。

家の中へはいりやいなや、ジュリアンは父のがっしりした手で肩をつかまれるのを感じた。またいくつかぶん殴られる覚悟をして、彼はふるえていた。

「まっすぐに、わしのいうことに返事しろ」老百姓の荒々しい声がジュリアンの耳のそばで叫ばれると同時に、その手は子供が鉛の兵隊を回転させるように、ぐるりと彼を向き変わせた。ジュリアンの涙にみちた黒い大きな眼は、彼の心の底まで読みとろうとする、この老木挽きのねずみ色の小さな眼とにらみ合った。

第五章 交渉

時をおくらせることによって、彼は事件を好転させる。

エンニウス

「さあ、できるもんなら、正直に返答してみろ、本きちがいめ！ いったい手前は、どうしてレナルの奥さんと近づきになったんだ。いつ話しかけたんだ」

「話なんか一度だってしたことはありません。だいいちお寺のほかであの奥さんに会ったことは一度もないんです」

「しかし手前は奥さんをじろじろ見たたりしたことがあるんじゃないや。図々しい奴だ！」

「いいや！ お父つあんも知つてのとおり、僕はお寺では神さまにしか眼をとめやしません」とジュリアンは、また頭をぶん殴られないようにするにはこれにかぎると思って、偽善的な様子でつけ加えた。

「だが、これには何かわけがあるにちがいない」と意地悪い百姓は言い返した。そしてちょっと口をつぐんでから、「だが手前なんかには何を聞いたってむだだ、根性曲りめ！ ほんとのことをいってやる。すぐ出てってもらうんだ。手前がいなけりや、わしの鋸だってずっと調子がよくならあ。手前の取り入ってる司祭さんか誰かだろ、手前にいい口を見つけてくれたんだ。さあ荷物をこしらえてこい。レナルさんのとこへつれてやる。手前はあすこの子供

の先生になるんだ」

「それでいくもらえらるんです？」

「食べて着物をもらって、それに三百フランの給料だ」

「下男になんかなるのはいやです」

「ばか！ 誰が手前に下男になれといった。わしが自分のせがれを下男にしたがってる、とでもいうのか」

「でも、誰といっしょに食事するんです！」

この問には爺さんもめんくらった。しゃべりつつけるうちに、何か不用意なことを言いそうな気がした。彼はジュリアンがしゃくにさわった。食い客坊め、と責めたてて、さんざんに罵った。そしてジュリアンを残して他の息子に

相談しに出て行った。

しばらくしてジュリアンは、彼らがめいめい斧によりかかって相談しているのを見た。長いあいだ彼らをじっと見つめていたが、何も見当がつかないので、ジュリアンは見つからないように製板小屋の向う側へ行つて腰をおろした。

彼は自分の運命を一変しようとする、この思いがけない話について熟考したいと思ったが、心がうきうきと落ちつかないのを感じた。彼の空想はひたすらに、レナル氏のりっぱな邸宅の有様を描き出そうとあせるのだ。

(だが召使といっしょに食事をさせられるくらいなら、むしろそんなものはすっぱりあきらめたほうがいい。おやじは強制しようとするだろう。死んだほうがまだましだ。十五フランハス一の貯金がある、今夜逃げ出そう。憲兵に見つかると心配のない間道づたいに、二日かればブザンソンへ出られる。そこで兵隊になろう。そして、もしやむをえなければ、スイスへ越してもいい。だがそうなると、もう立身出世の望みもなくなる。野心もすてなけりやならない。どんなことでも意のままあの結構な僧職にも、おさらばだ)

召使といっしょに食事をすることをそんなにいやがるのは、ジュリアンの自然の心ではなかった。彼は出世のためなら、もつとつらいことでもやっただろう。彼はこういう嫌悪を、ルソーの『告白』から教わったのである。これこそ彼の想像力が上流社会を心に描くための唯一の種